

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 134 号

2025年 10月



第 198 回観察会・鎌沼 高原植物観察会



兎平駐車場から出発

7月13日に第198回高山の原生林を守る会自然観察会を実施しました。参加者は15名でした。今回は初めての参加者が5名。新鮮な雰囲気での観察会となりました。集合場所の四季の里では曇り模様。しかし、スカイラインに入り、高山の山容が見えると青空が広がりました。梅雨時期によくある現象。

兎平駐車場から出発。浄土平でこのエリアの地形の成り立ちと森の形成過程を資料で確認し、改めて

目の前の光景を観察。知識が加わると新鮮な感動が加わります。

下見の時から8日後、標高1600mの高原の花暦もゆっくり推移。多くの眼で観察すると発見も多く、予定していた時間もオーバー気味。無事に、鎌沼の絶景ポイントで休憩地を確保し、昼食。ベテランの会員と初参加者達で和気あいあいと情報交換。

後半は鎌沼を中心に広がる爽やかな高原の風景を楽しみながら、鎌沼を周回し浄土平へ、植物たちの様々な花と果実の様子は何度見ても感動するばかり。

要した時間はコースタイムの3倍ですが、充実感はいくら以上。ゆっくり観察しないと味わえない山の魅力があります。



浄土平と一切経山



浄土平の成り立ちをおさらい

鎌沼・高原植物観察会に参加して

宋戸幸枝

昨年と今年、西吾妻山の登山道保全作業ボランティアに参加したご縁で高山の原生林を守る会の自然観察会へ今回初めて参加しました。

8時に四季の里駐車場に集合、ここで本日の行程と参加者の自己紹介。相乗りして兎平の駐車場へ向かいます。下から見上げた吾妻山は雲で見えませんでした。野地温泉を過ぎた頃から霧が晴れ反射板のある高山も原生林の緑と青空とでコントラストが映えます。

兎平駐車場で早々に常緑針葉樹のキタゴヨウマツを観察。雌雄同株で小さいパイナップルみたいな雄花と葉のない雌花、樹皮の特徴を確認し、浄土平から姥ヶ原へ。その登山道脇にミヤマハンノキ、この木は噴火経歴のある裸地や風衝地にいち早く侵入し緑色のまま落葉するため土地を肥やす効果が高い肥料木。

ハナヒリノキのザラザラした葉や壺型の花、アカミノイヌツゲの白く小さな花をルーペで観察。今まで通り過ぎていた樹木の花にも説明を聞くと新鮮で興味が湧いてきます。その林床には、ヤマブキショウマが咲き、その下にオオバノヨツバムグラの群生。何度も足を止め、目にした植物を観察しながら、ようやく姥ヶ原手前の湿原まで来ました。

今年、当たり年のワタスゲとコバイケイソウが沢山咲いています。木道を歩いて鎌沼の畔で昼食。360度のパノラマを眺めて食べるおにぎりはサイコーです。

ここから鎌沼を周り酸ガ平へ。途中、朽ちた木道に生えるモンローリップ(コアカミゴケ)を見つけ皆で撮影会、写真を拡大するとマリリンモンローそっくりな紅く魅力的な唇が何ともセクシー。白花と青花のミヤマリンドウが並んで咲き、特徴的な姿の腐生植物オニノヤガラにも出会い、一切経山の山肌を見ながら植生の成り立ちを学習して無事出発点の兎平に戻りました。

植物を見ながら説明を聞くと記憶にも残り、季節を変えて新たな植物を見つけにまた参加したいと思います。



キタゴヨウマツ雌花



アカミノイヌツゲ



コアカミゴケ

鎌沼・高原植物観察会に参加して

安齋 由(あんざい ゆか)

一昨年の夏、福島市の先達山が、突如、はげ山になりました。メガソーラー開発のためでした。再生可能エネルギーという良いエネルギーだと思っていたものが、大量の木を伐採して作られることに、驚きと疑問が生まれました。そして山の働きについて興味を持ち、山を間近で見たくなり、山登りを始めました。

観察会では、今まで知らなかった植物の名前だけでなく、生態まで知ることができました。パイオニア植物という、最初に裸地や、荒地に侵入して定着する、開拓者的役割をする植物がいることを知りました。そして彼らは栄養のある状態で葉を落とし、他の植物のための肥料にもなることに驚きました。また、土壌シードバンクという、土壌中に休眠状態で存在する種子の集まりがあることも知りました。彼らは、山津波や雷などで植物が伐採され、光が差し込むタイミングを何十年も待っているということ事を初めて知りました。

植物がなぜそこに生えているのか。群生しているのか。偶然ではなく、そこが自分に合っているから。又は、あった時に芽吹く。植えたわけでもないのに、自然にそこに生まれてくる植物たちの風景に、奇跡と生命力を強く感じました。

植物は、知れば知るほど違う世界が見えてくる、と感じた楽しい体験でした。また参加させて頂き、植物、そこに集まる生き物、生態系に思いを馳せたいです。ありがとうございました。



ミヤマハンノキ(パイオニア植物)

鎌沼の観察会によせて

大内 雅代

ゆかさんからの誘いで観察会へ。そして高山を守る会を知り、皆さまにお会いすることができました。兎平駐車場から出発。ミヤマハンノキ林から鎌沼に向かった。

キタゴヨウマツ。すべすべの樹皮。これは若いもの。ごわごわうろこ状のものは年を重ねている。同じ種類の木でも形状が異なることを知った。

白っぽく細長いヤマブキショウマの花。先端が赤く美しく染まったものに出会った。急に寒くなったことで変化したとのこと。

コケ類も豊富だった。一人では気づかず足を止めることはなかったかも。モウセンゴケにぐっと近づくと、透き通った羽が挟まっていた(鎌沼ではトンボが捕まっていた！大きな目がこちらを向いていた。)

ダケカンバはくねくねした姿のものも多かった。土の中に種を埋めていて、スポットライトが当たると出てくる「シードバンク」。いつかの出番に備え力を蓄えておきたい！

ミネヤナギには白く綿のような種「りゅうじょ」が見られた。聞きなれない言葉に、羽衣をまとった竜宮城のお姫様＝竜女？を想像。正しくは「柳絮」。

振り返ったとき、青空を背に、なだらかな高山が大きく近くに見えたのが印象的だった。すーっと吹く風が心地よかった。

鎌沼のほとりでランチ。皆さまからのお裾分けでお腹いっぱい。酢の物、サラダ、煮物、あんず、トマト、つつるの手作りこんにゃく！なんて豊かなひととき。ごちそうさまでした。

コバイケイソウ。今年は3～5年に一度の表年。地衣類モンローリップにも遭遇。ふと、顔を上げると、高山がいつも見えた。ひとつの山をいろいろな角度、高さから見られるのは新鮮だった。鎌沼の水は透き通っていてきれいだった。

酸ガ平小屋から浄土平へ。白い石と緑のしましまからなる構造土。これは森の始まり。ミヤマハンノキ、ミネヤナギ、ナナカマド、ミネザクラ、キタゴヨウマツはパイオニア植物だと学んだ。

腐生植物オニノヤガラを2か所で発見。

ツマトリソウをびっくりするほど顔を近づけて観察。花びらの上にぷちぷちが見られた。写真を撮るとき、これがキラキラ反射。少し暗くして撮るとよい。

立ち止まってもいい。わからなかったら聞いてもいい。森の学校の生徒になったようで嬉しかった。また、何度も鎌沼を歩いてみたい。

西の空を見ると、いつも近くに吾妻の山々がある。この観察会を経て、もっともっと近くに感じるようになった。

このような貴重な一日を過ごせたこと、心より感謝します。どうぞこれからもよろしくお願いいたします。



ヤマブキショウマ



ホソバミズゴケ・造精器



シロバナミヤマリンドウ



姥ヶ原の植物を観察



鎌沼



ツマトリソウ



オニノヤガラ

西大巔・西吾妻山登山道保全&植生回復ボランティア作業報告

佐藤 守

6月21日(土)と22日(日)に西大巔・西吾妻山エリアの登山道保全と植生回復作業を実施しました。

今回は初めて西吾妻小屋宿泊を計画に組み入れました。参加者は1日目14名、2日目11名でした。

高山の原生林を守る会の他に

YAMAP ユーザー等の登山者、グラ

ンデコ職員、環境省職員で今回も多様な構成メンバーとなりました。環境省職員はアクティブレングジャーの他に、福島事務所の若手登山愛好者の方々に参加していただきました。また、近自然工法登山道整備アドバイザーの中里浩さんが手弁当で駆けつけてくれて登山道整備のアドバイスをしていただきました。ボランティア参加者には遠く、東京や塩釜市から駆け付けていただいた参加者もあり、予定した以上の作業ができました。

実施した作業は以下の3種類です

- 1 誘導ロープ設置作業
- 2 登山道整備作業
- 3 植生回復作業

1日目は日帰り組と宿泊組併せて14名での作業でした。暑い中、西吾妻小屋まで登るのは大変で、その分、作業時間がずれ込んでしまい、下山組の下山時刻が遅れてしまったのは反省点です。

宿泊組は3時から一昨年張ったBSC(バイオロジカル・ソイル・クラス)ネットの網外しと設置作業を行いました。宿泊ですと、時間的な余裕があり、翌日は前日に残したロープ設置作業も朝仕事で終えられました。

2日目は、宿泊組はBCSネットを張ったか所で植生保護の石組作業を行った後、西大巔へ。樹林帯から笹帯までロープ設置作業を行ってから西大巔山頂直下崩壊地帯で日帰り組と合流しました。

合流後は2班に分かれ誘導ロープ設置・登山道整備作業とチングルマ挿木作業を行いました。昨年挿木したチングルマは昨年の葉は落ちていましたが、落葉後の挿し木苗から新芽がでており、記録的な豪雪にもめげずに新たな植生が確保できたことが確認できました。

斜面は記録的な積雪で、例年以上に斜面崩壊が進んでいました。ただ、これまで実施してきた土留めがなければ、もっと被害が激しかったのではないかなと思いました。ともあれ、本格的な土留め作業が必要で、そちらについては日を改めて取り組んでいくことになります。



6月21日西大巔山頂にて



ロープ設置作業



BSCシート敷設作業



登山道整備作業



崩壊地



チングルマの挿し木作業



挿し木後

梅雨入りとなった中で2日も好天に恵まれたのは何よりでしたが、暑い中、参加していただいた皆さんには感謝しかありません。お疲れさまでした。

西大巔ー西吾妻間登山道整備現地調査参加報告

佐藤 守

8月25日(月)に実施された西大巔ー西吾妻山間登山道保全現地調査(環境省主催)に同行してきました。これは2022年10月19日から実施されてきた生態保全型(近自然工法)登山道整備の効果を確認し、9月8日に実施される整備作業の方針を検討するのが目的です。

参加者は環境省裏磐梯自然保護官事務所、アドバイザー、アジア航測株式会社(国立公園ステップアップ事業受託会社)、高山の原生林を守る会、併せて5名でした。私を除く4名は20代から50代の健脚者ですから、先行していただき私はマイペースで西大巔を目指しました。スキー場からの登り100mぐらいまでは前夜の降雨で登山道は沢状態で沢登りと変わりません。加えて刈払いがされておらず登山道が藪に隠れるところも。それでも順調に西大巔山頂に到着しました。

嬉しいことに西大巔山頂手前では一度植生が途絶えた箇所にもヤマコゴメグサの群落が復活していました。ロープを設置し、立ち入りを防止した効果が出たようです。ここから、笹帯斜面の山側にヤマコゴメグサの復活を目的にロープを設置したいづれの箇所でもヤマコゴメグサの群落が確認できました。

崩壊斜面は上部から4か所の重点作業個所の状態を観察しながらゆっくり登山道を下りていきました。そして挿し木したチングルマの活着状況を観察。3か所の30本を挿したところでは、場所により活着率が大きく違っていました。どうも挿し木後の乾燥状態が影響しているようです。実用レベルの活着率があったところは、残った魔法の水をかけた場所でした。

BSC ネットに挿したチングルマは全滅でした。ここは、直射日光が当たる場所でした。それでも、BSC ネットはうっすらとコケの原系帯と思われる緑があった糸が一面に広がり、ジャゴケの繁殖器が確認できました。これにより保湿性が増すと思われますので、来年は再度、チングルマの挿し木をしたいと思います。

鞍部の水場で西吾妻小屋から戻ってきた先行組と合流し、昼食を取った後、西大巔まで戻りながら、崩壊か所の点検とこれまでの整備作業の効果を確認しました。幸いにして、植生回復が確認された箇所があちこちで見られました。9月8日は西大巔崩壊地帯に作業を集中することを確認して下山しました。

思いもよらず早く、この3か年の作業効果が出始めていることが確認でき、疲れましたがとても嬉しかったのは勿論ですが、これまで協力していただいたボランティア参加者の足跡が確実に残されていたことが何よりも嬉しいことでした。



挿木ブロック 1



挿木ブロック 2



挿木ブロック 3



BSC シートに着生したジャゴケ



BSC シート



植生が回復した水場通路



歩きやすくなった登山道

9 マタ・アトランティカの樹木

(1) イッペイ (*Handroanthus umbellatus* ノウゼンカズラ科タブペイヤ属)

ブラジル原産の樹木で、イペ・アゼロ・ド・ブレジョ (Ipê-amarelo-do-brejo) と呼ばれます。ブラジルの国花。日本の桜のようにブラジル国民に愛されています。ブラジル国旗の黄色は、イッペイの花の色に由来するとも言われています。落葉亜高木〜高木。葉は対生し、掌状複葉で、手のひらを広げたような形をしています。花は黄色。湿地のような土壤に自生します。

ブラジルでは常緑樹が普通ですがイッペイは冬には落葉し、春の初め(9月上旬)に葉より先に花を咲かせます。ブラジルでは、この花が咲くと春の訪れを感じるところも日本の桜と似ています。花の形はラッパ状で桜とは全く異なっていますが、華やかで亜熱帯にふさわしい姿かもしれません。黄色が好まれますが、紅紫やピンク、そして白色の花を咲かせる種類 (*Handroanthus impetiginosus*) もあります。

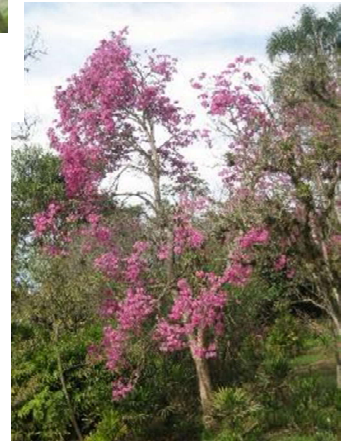
材は固く、ウッドデッキ、フローリングなどに使用されます。また、パウ・ブラジルの代用材としてバイオリンの弓材に使用されます。



咲き始めたイッペイ
(*Handroanthus umbellatus*)



イッペイ
(*Handroanthus umbellatus*)



ピンク色のイッペイ
(*Handroanthus impetiginosus*)

(2) パウ・ブラジル (*Paubrasilia echinata* マメ科ブラジルボク属)

ブラジル東部のリオデジャネイロ州とリオグランデ・ド・ノルテ州の間の大西洋熱帯雨林に自生する樹木。1540 年にポルトガル人によってはじめて報告されました。パウ・ブラジル (Pau Brasil) は「赤い木」を意味します。ブラジルという国名の由来となっています。ポルトガル人がインド航行の途中にブラジル海岸に漂着した際、持ち帰った木材です。この木材からは貴重な赤い染料が取れました。ポルトガルでは、心材から染料の紅色色素 (ブラジリン) が取れるインド原産のスオウ (*Biancaea sappan*) をパウ・ブラジルと呼んでいたことから、ブラジル海岸で採取された木も同様の名で扱われ、その原産国を「パウ・ブラジルの国」と呼ぶようになりました。パウ・ブラジルの赤い染料は、貴族の布地の染色に広く使用され、自生地での乱獲が進みました。

「パウ・ブラジル」はブラジル原産樹とインド原産のスオウを指すといった、ややこしい経歴があります。更に、16 世紀前半に、枯渇したパウ・ブラジルの代替品としてサガの木 (árvore saga、学名 *Adenanthera pavonina*) が東南アジアから持ち込まれ、ブラジル東北地方の一部現地人に「パウ・ブラジル」と呼ばれるようになりました。つまり、少なくとも 3 種の樹木がパウ・ブラジルとして混同されてきました。現在は、パウ・ブラジルは *Paubrasilia echinata* を指します。IUCN に絶滅危惧種として登録され、サンパウロなどで増殖が図られています。また、パウ・ブラジル (*Paubrasilia echinata*) は材が硬いため、現在でも弦楽器の最高の弓のスティック (棹) 材として評価されています。*Paubrasilia echinata* は小葉が互生です。黄色い花を着けますが、着花することは稀です。



パウ・ブラジル



パウ・ブラジルの樹皮



パウ・ブラジルの葉

ヤマオダマキ (*Aquilegia buergeriana* キンボウゲ科オダマキ属)



吾妻連峰のブナ林の林縁や草地に生育する多年草。日本固有種。半日陰～明るい林縁で、湿潤で腐植質に富む土壤に生育する。ミヤマカラマツやエゾアジサイの植生地と重なるため、競合により、自生地は極めて限られる。

「オダマキ(苧環)」という名前は、昔の糸巻き器具に由来する。苧(お)はカラムシや麻などの繊維を意味し、環(まき)はそれを巻いた管のことを指す。ヤマオダマキの花の距(きょ)が後方に伸びる様子が、この糸巻きの形に似ていることから「苧環」と呼ばれるようになった。

葉は互生。根出葉は地際からロゼット状に束生し、長い葉柄を持つ。2回3出複葉で小葉の裂片は少なく丸みを帯びている。茎葉は1回3出複葉で葉柄は上部では無いが短い。小葉は扇形で、先端が2～3裂し、裂片がさらに浅く分かれる。裂片は丸みを帯びる。葉質はやや厚みがあり、表面は滑らかで光沢は少ない。裏面は粉白色で、基部近くに軟毛が散生する。

花は腋性。先端部の複数の葉の葉腋から集散花序を形成し、複数の小花を下向きに咲かせる。

ガク片は5枚、狭卵形で色は紫褐色～帯青色。花弁状に発達し、外側に広がる。その内側に黄色い筒状の花弁を5枚、下向きに着生する。花弁の基部が袋状に伸びて距を形成する。距はやや弓状に曲がり、先端が小球状になる。オオヤマオダマキの距は内側に巻き込む。距は蜜をためる器官で花粉媒介昆虫であるマルハナバチは口吻を延ばして距の奥の蜜を吸う。雄しべは多数。葯は黄色。雌しべは5本。雄しべと雌しべの間に鱗片状の仮雄しべを着生する。雄ずい先熟。主たる繁殖方法は種子繁殖である。



ヤマオダマキは南会津、ミヤマオダマキは蔵王山系や月山で見かけていた。しかし、吾妻・安達太良山系ではこの仲間には出会ったことがなかった。今から11年前に、高山の原生林を守る会の会員と吾妻山麓の沢を散策する約束をした。その待ち合わせ場所の近くで偶然、群落に遭遇した。その美しさには強烈な印象がある。

ベニバナイチゴ (*Rubus vernus* バラ科キイチゴ属)

吾妻連峰のオオシラビソ林に植生する落葉低木。キイチゴの仲間。雪田などの湿生地で群落を形成している。日本固有種。キイチゴ属の多くは鋭い刺を持ち、地下茎や地上茎で繁殖するが、ベニバナイチゴは刺がなく、クローン繁殖もほとんど行なわれない。種子による有性繁殖である。クローン繁殖を行わないことで、遺伝的多様性を維持しやすいという利点もある。地上部の寿命は比較的長く、他のキイチゴは1～2年で更新されるのに対しベニバナイチゴは3～4年維持されることが多い。

葉は互生。基本的には3出複葉であるが、茎の下部では単葉で3裂することもある。頂小葉はひし形状広倒卵形で先端は尖る。側小葉は卵形で、まれに浅く3裂することがある。葉縁には粗い重鋸歯がある。葉脈はくぼみしわ状。葉柄、葉身の両側に軟毛が着生する。



花は頂生。前年枝の先端に濃紅色の花が1輪、下向きに咲く。ガク片は卵状三角形で5個、先端は尖る。花弁は5枚の倒卵形で、縦にしわがあり、平開しない。花柄や萼には軟毛が密生し、腺毛が混じる。雄しべ、雌しべ共に多数あり、中央の雌しべ群を多数の雄しべが囲む。葯は黄色、柱頭の色は、受粉前は白っぽく、成熟につれて淡緑色を帯びる。花粉媒介昆虫はマルハナバチである。集合果は他のキイチゴ類に比べて、果実の完熟が遅く、酸味が強い。

ベニバナイチゴの開花期は、雪解けの時期と重なる。西吾妻登山道ロープ設置作業では、この「雪田の縁に咲く紅一点」によく出会う。葉に隠れるように咲く花は、控えめながらも凛とした美しさを放つ。

第199回自然観察会 立子山・大館山 里山の陽だまり観察会

日時：2025年11月23日（日）8:00～16:00

集合場所 小島の森駐車場 総会会場 東部学習センター

集合時間 8:00 参加定員 20名（総会は定員なし）

内容 福島市東部の立子山エリアの標高271.6mの里山・大館山のコナラ・クヌギ林や溪畔林の紅葉と歴史遺構を観察します。芋煮を楽しんだ後、総会です。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋（軍手）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、ごみ袋、食器。

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（500円）、申し込み：11月22日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

西吾妻登山道誘導ロープ取下げ作業と登山道保全整備作業（詳細は佐藤守まで）

今回は9月8日に予定された環境省主催の西大巔登山道保全作業が雨の為、中止となり、当会の10月18日のロープ取下げ作業と併せて実施することになりました。

以下はロープ取下げ作業の実施内容です。ネイチャーフロント米沢さんと共同で行います。

1. 実施日：10月18日（土）6:00～17:00（雨天時10月19日に順延）
2. 定員 多数の参加をお願いします。
3. 内容 グランデコススキー場 Gondola 終点から西大巔に登り、西大巔山頂から西吾妻小屋までのロープ取り外し作業を行います。
4. 集合場所・時間：四季の里正面入り口駐車場 6:00 現地（グランデコススキー場駐車場）7:00
5. 申し込み：10月16日（木）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします。（電話申込は午後7時～9時でお願いします）

西大巔登山道保全整備作業のお知らせ

主催 環境省 共催 高山の原生林を守る会

実施日 10月18日（土）

予備日 10月19日（日）

集合時間・場所

7:00 グランデコススキー場駐車場

アドバイザーと一部スタッフは前日に西吾妻小屋に

宿泊します。小屋泊希望者は前日小屋集合

作業箇所：西大巔直下斜面崩壊地帯

作業内容

資材の荷上げ、残存植生周辺に石詰め土嚢設置、既存土嚢に竹串の補強、BSCシートの敷設、登山道沿いの石積み、溝切と土嚢敷設



作業山域と作業箇所

紀行文、自然保護、観察記録、エッセイ、ポエムなど皆さんからの投稿をお待ちしています。

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第134号 2025年10月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://adumatakayama.justhpbbs.jp/index.htm>
(URLが変わりました)

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤